

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02355

研究課題名(和文) グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の運用に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Research on the Operation of a Japanese Pronunciation Online Course in Global MOOCs

研究代表者

戸田 貴子 (Toda, Takako)

早稲田大学・国際学院(日本語教育研究科)・教授

研究者番号：30292486

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,400,000円

研究成果の概要(和文)：ハーバード大学とMITの共同開発によるedXにおいて、初の日本語教育講座である Japanese Pronunciation for Communicationを無料配信した。

1. 諸外国の日本語学習者/非母語話者教師を対象に運用調査を行った。2. 相互評価の統計分析により教育効果を検証した。また、動画再生ログの統計結果をもとに学習行動を分析した。3. 日本語学習者にインタビューを行い、質的分析を行った。また、日本語母語話者の評価研究を行った。研究成果は日本・中国・韓国・米国・ベトナム・タイ・フランス・イタリア・ドイツ・オーストリア・イギリス・カナダ・オーストラリアの学会・セミナー等で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

JPCは総登録者数が88,792名(2023年6月19日現在)に至り、「開かれた学びの場」を創出し、世界中の「日本語を学びたい・教えたい人たち」に学習機会を提供した。また、コロナ禍で教室活動が困難な状況下で、認証付き受講者数が増加した。このことは、大学等の教育機関がJPC受講を単位認定に利用したり、学習者がよりよい将来に向けてキャリアアップのためにJPCを利用したりしたということを示唆している。本研究成果により、オンライン日本語教育を進化させ、ポストコロナ時代における次世代の学習支援のあり方を提案することができた。

研究成果の概要(英文)：We have distributed worldwide "Japanese Pronunciation for Communication", the first Japanese language education course on edX, which was jointly developed by Harvard University and MIT.

1. An operational survey was conducted on Japanese learners/non-native teachers of foreign countries. 2. The educational effect was verified by statistical analysis of peer assessment. In addition, learning behaviour was analysed based on the statistical results of the video playback log. 3. Japanese learners were interviewed and qualitative analysis was conducted. We also conducted an evaluation study of Japanese native speakers. The research results have been presented at academic conferences and seminars in Japan, China, Korea, the United States, Vietnam, Thailand, France, Italy, Germany, Austria, the United Kingdom, Canada, and Australia.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 音声学 発音 e-Learning ICT MOOC

1. 研究開始当初の背景

2012年の国際交流基金の調査によると、世界の日本語学習者は399万人に上っている。日本語教育の推進は世界の人々による日本理解にもつながり、日本と諸外国を結ぶ懸け橋となり得る。そこで、新しい形の日本語学習支援の方法を提案し、日本語教育の普及に努めるために、本研究を開始した。

日本語教育の現場では、一般に、学習開始時に学習者の「日本語レベル」を確認し、学習者を適切なクラスに配置するということが行われている。また、発音は学習者の母語の影響が強いと考えられている言語領域であることから、母語別に指導をすべきであるという意見が度々聞かれる。「日本語レベル」や「母語」といった枠組みで、学習者を括り分け、より質の高い教育を提供するという考え方には一理あるが、それは閉ざされた空間において、限られた学習者を対象とした教育のあり方にほかならない。知識と経験の豊富な教師が、学習者と対面で丁寧に行う指導に勝るものはないが、それには、大きな時間的・物理的制約があり、限られた数の日本語教育の専門家が世界中の日本語学習者に学習機会を提供することは不可能である。特に、発音指導というと、対面式授業で教師がモデル音声を提示し、学習者にリピートさせて、教師がその発音を直すというイメージが一般に持たれることが多い。文型や語彙など、教えるべきことが多い中、「発音にまで手が回らない」という声も度々聞かれる。しかしながら、教師が考える以上に、学習者は発音上の問題が日本語でのコミュニケーションの弊害になるという経験をしていることが、平成16-17年度科研費基盤研究(C)課題番号16520357(研究代表者:戸田貴子)の研究成果からわかっている(戸田,2008)。また、日本語教育の普及のためには、現地で教える非母語話者教師の存在が大きい、「日本語が母語ではないので、発音に自信がない」という非母語話者教師が多いのが現状である。このようなことから、当該分野の研究は、世界における日本語教育の発展のために不可欠である。そこで、公共的に「開かれた学びの場」を創出し、世界中の「日本語を学びたい人たち」に学習機会を提供するために、どのような教育実践が実現可能なのかを検討し、提案していきたいと考えた。

申請者はこれまで教室という枠にとらわれない「開かれた学びの場」を提供することを目指し、オンライン教育に積極的に取り組んできた。まず、2007年に日本語発音オンデマンド講義の開発を開始し、完成した15週間分のコンテンツを2009年から継続的に授業で運用している。早稲田大学のLMS(Learning Management System)上で、履修者がいつでもどこでも本コンテンツにアクセスし、学習することができるようにした。また、平成18-20年度科研費基盤研究(B)課題番号18320094(研究代表者:戸田貴子)では、研究成果を踏まえ、日本語音声教育用教材を開発し、DVDを制作するとともにインターネットで一般公開した。

次に、2012年度秋学期に、最初の5週間を対面式授業で行い、残りの10週間はインターネットを活用してオンデマンド授業で行う、つまり学期途中で「教室が消える」という日本語発音クラスを立ち上げた。この対面・オンデマンド併用型授業は、従来の日本語音声教育のあり方を覆すものであった(戸田・大久保,2014)。しかしながら、正式に履修登録した学習者はアクセスできるが、学外者は利用できず、履修者も授業期間が終了すると、復習したくても本コンテンツを利用することができなくなってしまう。複数の学習者から、授業期間が終了しても使い続ける方法はないかという問い合わせがあったこと、また、このようなニーズに応え、大学をとおして正式に海外協定校等に利用を許可していたことなどから、より広く本コンテンツを

一般公開する可能性を模索していた。(本コンテンツを活用した留学生対象日本語科目は、2013年度に第1回 Waseda e-Teaching Award を受賞した。)

そこで、2015年春学期から、Waseda Course Channel という講義動画サイト一般公開し、国内外の学外者も視聴できるようにした。このことによって、いつでもどこでも世界中からアクセスすることが可能になった。アクセス状況に関する調査の結果から、学外からの接続比率が高く、国内よりも海外からの接続比率が高いことがわかっており、海外の日本語学習者・日本語教育関係者によるニーズが浮き彫りになった。また、Waseda Course Channel で公開されている全ての学問領域の講義動画の中で、本動画の視聴回数合計が1位であったことから、ニーズの高さが窺える結果となった(戸田・大久保, 2016)。(本コンテンツを活用した日本語教師養成科目は、2015年度秋学期早稲田ティーチングアワード総長賞を受賞した。)

上記のように、数々のオンライン教材の開発と一般公開への取り組みを経て、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学の共同開発によるグローバル MOOCs (Massive Online Open Courses : 大規模オンライン講座) の edX(<https://www.edx.org/>) にて世界初の日本語教育講座「Japanese Pronunciation for Communication」(以下、JPC) を2016年11月から新たに無料配信することが決定した。

2. 研究の目的

本研究の最終目的は日本語教育の普及をとおして、日本と諸外国を繋ぎ、社会貢献を行うことである。具体的には以下の3つの研究目的に従い調査研究を行った。

【調査1】MOOCs のグローバルプラットフォームである edX に日本語教育コンテンツを無料配信し、運用状況を把握することにより、世界中の日本語学習者・日本語教育関係者に当該分野では前例のない新たな学習支援の方法を提案する。【調査2】1で得られたビッグデータに基づき学習行動の統計分析を行い、教育効果を検証する。【調査3】本コンテンツを利用した日本語学習者にアンケートおよびフォローアップ・インタビューを行い、ICT を活用した次世代のよりよい教育実践のあり方を提案する。

3. 研究の方法

【調査1】運用調査：JPC を無料配信し、中国・韓国・ベトナム・フランスの日本語学習者／非母語話者教師を対象に、様々な学習環境において、遠隔による日本語音声教育の可能性を検証した。具体的な調査方法は以下のとおりである。

中国・韓国・ベトナム・フランスの大学で日本語を学ぶ学習者各10名に、JPC を活用して発音を学習し、学習記録を提出してもらった。学習記録を分析することにより、ICT を活用した発音学習方法の検討を行った。また、JPC の学習効果を検証するために、学習者に JPC の学習テーマ毎に録音データを提出してもらい、日本語母語話者30名による発音評価の調査を実施した。さらに、中国・韓国・ベトナムで日本語を教える非母語話者教師各3名、フランスの大学で日本語を教える非母語話者教師1名に JPC の視聴および報告書の提出を依頼した。提出された報告書を分析することにより、海外の教育現場における JPC 活用方法および遠隔による日本語音声教育の可能性を探った。

【調査2】量的調査：JPC の学習者行動に関するビッグデータの統計分析結果から「どのように学んだ学生が、どのような成果を得たのか」を明らかにし、量的研究の観点から教育効果を検証した。具体的な調査方法は以下のとおりである。

JPC の「発音チェック」に相互評価を設定した。学習者は課題文の音声聞き、練習したあ

と、課題文を録音し、音声ファイルを提出した。学習者はほかの受講生の音声聞き、評価を行った。評価後、自分の音声ファイルに対する評価およびコメントが提示される仕組みを作った。評価方法は、選択式と自由記述式を設け、提出された学習者のコメントを量的・質的ともに分析した。分析結果から、相互評価の継続状況、コメントの特徴を明らかにし、教育効果を検証した。

また、動画の視聴実態を把握すべく、視聴完了率や視聴回数をコンテンツごとに分析を行った。分析結果から、受講生の行動および学びの内容を明らかにし、教育の改善に向けて示唆を行った。

【調査3】質的調査：JPC を利用した日本語学習者を対象に、質的研究の観点から Pre/Post アンケートおよびフォローアップ・インタビューを行い、よりよい教育実践のあり方を提案した。具体的な調査方法は以下のとおりである。

国内の大学における JPC を活用したオンデマンド併用授業で日本語発音を学ぶ学習者 15 名を対象として、フォローアップ・インタビューを行った。文字化資料を質的分析ソフト MAXQDA によってコーディングし、分析を行った。分析結果から、ICT を活用した日本語音声教育のモデル構築のための検討材料を得た。

4. 研究成果

ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学の共同開発によるグローバル MOOCs の edX において開講した JPC は、世界中の日本語学習者・日本語教育関係者に向けて無料配信されており、11 期分の開講において、170 の国や地域から集まった総登録者数は 88,792 名（2023 年 6 月 19 日現在）となった。本研究課題の申請時（2016 年 10 月）の 7,800 名（140 か国）の 11 倍以上になり、教師が学生の発音を聞いて直すという従来型の授業では、達成することができない数に至った。

また、コロナ禍で教室活動ができなくなり、リモート授業にせざるを得ない状況下で、認証付き受講者数（単なる聴講ではなく、修了基準を満たすと修了証が発行される）が増加した。このことは、大学等の教育機関が JPC 受講を単位認定に利用したり、ロックダウン中においても学習者がよりよい将来に向けてキャリアアップのために JPC を利用したりしたということを示唆している。

本プロジェクトによって、中国・韓国・ベトナム・フランスで日本語学習者／非母語話者教師を対象に JPC 運用調査を行い、様々な学習環境において、遠隔による日本語音声教育の可能性を検証することができた。また、量的研究の観点から、JPC の学習者行動に関するビッグデータの統計分析結果をもとに、相互評価にみられる受講者の学びを明らかにし、教育効果を検証することができた。加えて、動画再生ログの統計分析結果から、学習者がどのように動画を再生し、学びを得ているのかを検証することができた。最後に、質的研究の観点から、JPC を利用した日本語学習者を対象に半構造化インタビューを行い、文字化資料を作成し、分析を行った。加えて、JPC の SPOC (Small Private Online Course) 利用について検討を重ね、日本語音声教育におけるブレンディッド・ラーニングを提案した。

本プロジェクトの研究成果をもとに、学会、大学等の日本語教育機関、国際交流基金等において、研究発表、招待講義・セミナー・ワークショップ等を行った。（以下、研究業績を参照。）2020 年 3 月には新型コロナウイルス感染症への対策として、教職員の海外渡航が原則禁止となり、研究活動が困難になったため、2020 年度および 2021 年度は繰越を行った。日本、米国、フランス、カナダ、韓国、中国、オーストラリアではオンラインにより研究成果を発表し、海

外の研究者とも意見交換を行った。

本研究の成果によって、オンライン日本語教育を進化させ、ポストコロナ時代における次世代の学習支援のあり方を提案することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 戸田貴子・大久保雅子・胡偉	4. 巻 24
2. 論文標題 ブレンディッド・ラーニングが広げる新たな日本語音声教育の可能性 学習者へのインタビュー調査から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal CAJLE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 戸田貴子・大戸雄太郎	4. 巻 10
2. 論文標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の使用調査 フランス人学習者を対象として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 フランス日本語教育	6. 最初と最後の頁 151-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 戸田貴子	4. 巻 4
2. 論文標題 情報化時代の日本語教育研究 教育のグローバル化と大規模公開オンライン講座（MOOCs）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 韓国日本学会企画叢書 日本語学・日本語教育編	6. 最初と最後の頁 208-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 戸田貴子・千仙永・伊藤沙智子	4. 巻 63
2. 論文標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座 韓国人学習者および教師を対象とした調査から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学研究	6. 最初と最後の頁 39-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14817/jlak.2020.63.39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 戸田貴子・胡偉・大久保雅子	4. 巻 7(03)
2. 論文標題 中国学習者対JPC発音慕課使用状況的質性研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北亜外語研究	6. 最初と最後の頁 70-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.16838/j.cnki.21-1587/h.2019.03.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TODA, Takako	4. 巻 Vol.9, No.1.
2. 論文標題 New Approaches to Language Education: Utilizing Online Resources to Teach Japanese Pronunciation	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japanese Studies Association of Thailand	6. 最初と最後の頁 8-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14456/jsnjournal.2019.11	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸田貴子	4. 巻 26
2. 論文標題 ブレンディッド・ラーニング 新たなモデルの構築と音声教育実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 107-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸田貴子・大戸雄太郎・竹内雪乃	4. 巻 26
2. 論文標題 発音チェックにおけるフィードバックの工夫 オンラインでのラポール形成を目指して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 179-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸田貴子・大久保雅子・千仙永・趙水清	4. 巻 170
2. 論文標題 グローバルMOOCsの相互評価における継続参加 日本語発音オンライン講座の分析を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 32-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20721/nihongokyoiku.170.0_32	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸田貴子・大熊伊宗・大戸雄太郎・夏蕊	4. 巻 22号
2. 論文標題 リレー形式の発音BBSをととした学習者の主体的な学び	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸田貴子	4. 巻 23号
2. 論文標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座 受講者アンケートの分析結果から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸田貴子	4. 巻 第9章第3節
2. 論文標題 グローバルMOOCsにおける世界初の日本語講座	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 公共日本語教育学 社会をつくる日本語教育	6. 最初と最後の頁 193-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計52件（うち招待講演 37件 / うち国際学会 16件）

1. 発表者名 戸田貴子・大久保雅子・千仙永
2. 発表標題 日本語母語話者は学習者の発音をどのように評価しているか 質的研究の観点から
3. 学会等名 韓国日本学会第103回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 よい授業とはどのような授業か 「学び」を問い直す
3. 学会等名 2021年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸田貴子・胡偉
2. 発表標題 ポストコロナ時代のオンライン日本語教育 中国のブレンディッド・コースを例に
3. 学会等名 早稲田大学日本語教育学会2021年春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸田貴子・大戸雄太郎
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語オンライン講座の使用調査 フランス人学習者を対象として
3. 学会等名 第17回フランス日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸田貴子・大久保雅子・胡偉
2. 発表標題 日本語音声教育におけるブレンディッド・ラーニングの実践 グローバルMOOCsを導入したコースを一例として
3. 学会等名 カナダ日本語教育振興会CAJLE2021年次大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸田貴子・大久保雅子・千仙永
2. 発表標題 オンライン講座を活用した日本語発音学習の効果検証
3. 学会等名 2021年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 戸田貴子・大久保雅子
2. 発表標題 ICTを活用した日本語学習者における音声習得 米国人学習者を対象とした縦断調査の結果から
3. 学会等名 2020 AATJ Annual Spring Conference, American Association of Teachers of Japanese（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 日本語教育と日本学研究：オンライン化がもたらす新たな学びのかたち
3. 学会等名 2020年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 戸田貴子・千仙永・伊藤沙智子
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の運用調査 韓国人学習者を対象として
3. 学会等名 韓国日語教育学会第35回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸田貴子・大久保雅子
2. 発表標題 新しいオンライン学習環境を活用した日本語音声教育の効果 英語母語話者のケーススタディー
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸田貴子・千仙永・伊藤沙智子
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の運用調査 韓国人教師を対象として
3. 学会等名 韓国日本語学会 第40回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 韓国人学習者のための日本語音声教育 伝わる日本語を目指した発音学習支援
3. 学会等名 韓国日本語教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 戸田貴子・胡偉・大久保雅子
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の運用 中国人学習者を対象として
3. 学会等名 2018年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸田貴子・大戸雄太郎
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語オンライン講座の動画再生ログにみられる視聴実態
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座 英語字幕・英語音声翻訳ファイルを利用したブレンディッド・ラーニング
3. 学会等名 英国日本語教育学会(BATJ)第21回大会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸田貴子・胡偉・大久保雅子
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の運用調査 中国人教師を対象として
3. 学会等名 2018年上海外国語大学日本学国際シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸田貴子・大久保雅子・サイティマイ
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の使用調査 ベトナムで学ぶ学習者を対象として
3. 学会等名 ベトナム日本語学日本語教育学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 情報化時代の日本語教育研究 教育のグローバル化と大規模公開オンライン講座（MOOCs）
3. 学会等名 韓国日本学会第96回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 教育のグローバル化がもたらす新しい学びのかたち
3. 学会等名 2018年日本語教育と日本学国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸田貴子・大久保雅子・千仙永・趙水清
2. 発表標題 グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座 相互評価と個別フィードバック
3. 学会等名 CASTEL/J2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 ICTを活用した外国語教育 グローバルMOOCsにおける日本語音声教育を例として
3. 学会等名 外国語メディア学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 戸田貴子
2. 発表標題 ベトナムにおける日本語教育に求められるもの 会話教育のための発音学習支援
3. 学会等名 ハノイ国家大学外国語大学国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Takako Toda, Giuseppe Pappalardo	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Hoeppli	5. 総ページ数 148
3. 書名 Pronuncia e accento nella lingua giapponese: Teoria ed esercizi	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【その他の招待講演】 2017年 大連外国語大学、ハノイ国家大学外国語大学、ホーチミン市師範大学、ダナン外国語大学 2018年 韓国外語大学、高麗大学、建国大学、ソウル女子大学、上海外国語大学、華東師範大学、同濟大学、香港大学、エディンバラ大学、ニューカッスル大学、ロンドン大学SOAS、Ho Chi Minh University of Technology、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学 2019年 国際交流基金シドニー日本文化センター、オーストラリア国立大学、西安外国語大学、西安交通大学、泰日経済技術振興協会・タイ国日本研究協会、イタリア日本語教育協会、ウィーン日本語教師会、建国大学、ボルドー・モンテニュ大学、川崎市国際交流協会、国際交流基金ケルン日本文化会館、西安外国語大学、西安交通大学 2020年 オーストラリア国立大学 【関連URL】 Japanese Pronunciation for Communication https://www.edx.org/course/japanese-pronunciation-for-communication 早稲田大学日本語教育研究科 戸田貴子研究室 http://www.gsjal.jp/toda/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	千 仙永 (Chun Sunyoung) (90780172)	東京大学・グローバルキャンパス推進本部・助教 (12601)	
研究分担者	大久保 雅子 (Okubo Masako) (80835611)	早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授 (32689)	
研究分担者	李 在鎬 (Lee Jeho) (20450695)	早稲田大学・国際学術院(日本語教育研究科)・教授 (32689)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	胡偉 (Hu Wei)	早稲田大学・日本語教育研究科・訪問学者 (32689)	
研究協力者	大戸雄太郎 (Odo Yutaro) (70908847)	東京国際大学・JLI・専任講師 (32402)	
研究協力者	サイティマイ (Sai Thi May)	早稲田大学・日本語教育研究科・研究生 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------